

赤軍

No. 7

「国際根拠地、蜂起の軍隊、国際地下組織」の
三つの教訓の物質化

共産主義者同盟赤軍派

☆「国際根拠地、蜂起の軍隊、国際的地下組織」の三つの教訓の物質化

局地的反革命は侵略抑圧戦争(体制間戦争)への世界階級危機を、七〇年前段階武装蜂起で、世界革命戦争(対峙)へ／＼

△はじめに▽ 我々の任務を確定するにあたって……………(3)

Ⅰ党派闘争の現状と右翼的分解

Ⅱ七〇年闘争と前段階蜂起

△Ⅰ章▽ 「前段階武装蜂起—国際根拠地」—蜂起の軍隊と軍事問題」と国際的地下組織との革命的連関—攻撃型世界革命の核心……………(7)

△Ⅱ章▽ 世界革命戦争戦略構想と七〇年前段階蜂起……………(16)

Ⅰ我々の教訓—その内的連関

Ⅱ前段階蜂起の根拠とその性格—スターリン主義について……………(16)

Ⅲ何故に「前段階武装蜂起貫徹—国際根拠地創出」に武装された世界党—世界赤軍、蜂起の軍隊が必要なのか—現代帝国主義と革命の内的発展過程……………(16)

△Ⅰ章▽ 世界革命戦争戦略構想と七〇年前段階蜂起……………(16)

Ⅰ即目的前段階蜂起の敗北と世界党—世界赤軍—蜂起の軍隊の要求—国際階級闘争—国際共産主義運動の現局面……………(16)

Ⅱ世界革命戦争の発展段階、世界革命戦争戦略図と七〇年前段階武装蜂起……………(16)

△Ⅱ章▽ 七〇年前段階武装蜂起と世界委員会……………(19)

Ⅰ日本委員会の任務……………(19)

Ⅱ現代カウッキ主義、ソウリエト運動主義、内戦主義者を粉砕し、3月革命戦線(ソウリエト運動大会)に結集せよ……………(21)

☆現代カウッキ主義、ソウリエト運動主義、内戦主義者を粉砕し、3月革命戦線(ソウリエト運動大会)に結集せよ……………(21)

＜Ⅰ＞ 党派闘争の現状と右翼的分解

「国際根拠地、蜂起の軍隊、国際的地下組織」の三つの教訓の物質化

局地的反革命—侵略抑圧戦争・体制間戦争への世界階級危機を、七〇年前段階武装蜂起で、世界革命戦争(対峙)へ／＼

△はじめに▽ 我々の任務を確定するにあたって……………

あたって……………

全国の同志諸君／同盟員諸君／

同盟は、今秋前段階武装蜂起の敗北の教訓(国際根拠地、蜂起の軍隊、国際的地下組織)を踏まえ、これを物質化しつゝ、更なる前段階武装蜂起を七〇年に貫徹することを確認した。

現在、空々しい選挙フェスティバルの裏面では、今秋決戦を闘った、先進的活動家、党派の総括論争が、激しい内ゲバを伴いつつ、進行している。

七〇年闘争の展望と任務が、全ゆる活動家層に、今秋決戦の敗北の、根底的総括の下にうちたてられねばならなくなっている。

だが革マル、六—八派の党派闘争は、何んら、これ等の問われている質に込えているものではない。その意味で、内ゲバは極めて不毛なものとなっている。革命的党派闘争はどこにも行なわれていないといっても過言ではない。

革マル派は、六〇年安保闘争の敗北と旧BUNDの崩壊—革共同への再編統合を夢みて、六—八派、我々に対して、党派解体闘争を挑んでいる。だが、大衆活動家—党派も、過去の六〇年安保闘争時の未経験—未成熟なそれではなく、十年の厳しい階級闘争の荒波をかいくぐっており、彼等の神秘主義的な哲学の言辭—実際は右翼日和見主義、街頭主義の否定・労働運動主義に惑わされはしないのである。

彼等は、今秋決戦での完全なカンパニア闘争主義を、「労働運動の右傾化に抗する闘いと、プロレタリアの主体形成」を主張し、合理化している。

六〇年安保以降主張してきた、「プロレタリア急進主義の克服・反帝反スタのプロレタリアの主体性」も、結局のところ、最も実践的な姿に於いては、「労働運動介入の組織戦術—生産点の強化」として全く陳腐な結論に落ち着いたのである。

かかる革マル派が、六—八派に反撥を買い、粉砕されるのは当然であり、我々と六—八派は、このような低然たる経済主義者の動向に介入するのは全く当然の権利である。

だが、六—八派が、この革マル派の動向を粉砕し切れないのも、当然の帰結である。何故なら、今秋決戦に於いて階級闘争の根底的飛躍を遂げる闘いを、彼等は遂行し得なかったし、遂行しようとしなかったからである。そして、十一月決戦を「勝った、負けた」で争おうとも、いづれにしても、階級闘争の核心問題に込え切れず、何んの根本的総括もし切れず、七〇年を従来の連りにやろうとしているからである。

革マルの如き右翼日和見主義集団が、一定程度膨張すること事態、そして彼等との内ゲバが、総括過程の主要事になること自体、正に、今秋決戦の敗北的事態の証書であり、六—八派を前段階武装蜂起に牽引し分解させきれなかった、我々の敗北の結果でもある。

その鍵があることを理解し得ず、その結果として、「前段階蜂起の性格」蜂起の開始の性格「それへの準備の性格」に於て、曖昧性をもっていたこと。即ち「政府中核武装占拠闘争の全面展開か」「暫次の包圍主義的蜂起か」に於て、前者に絞られず、曖昧であったこと。

②以上の曖昧性が、軍隊の性格を、「蜂起の軍隊か」「遊撃戦の軍隊か」に於て曖昧で、蜂起の軍隊に見合う、軍隊建設闘争に徹底し得ないでいたこと。

③かつ、①からして、我々の党活動の基調を、確定—定型化—計画的なものにし得ず、それ故に、世界「党」軍—革命戦線」ではなく、一国的「革命戦線」—軍—党の組織体系と、存在形態を残存させ、大衆追随—経済主義的な残滓を拭き切れなかったことである。

④これらこそが、敵の介入を許し、技術を徹底して、技術として対処することと弱め、敗北を掃因せめたのであった。我々が、事態の意味を把握し得るには余りにも、時間は少なかつたのである。

だが、我々が、我々の思想と理論に忠実であつたからこそ、我々は、革命的敗北主義の立場を堅持し、死線の中で、我々を導く赤光を発見し、我々を昂め、中途で挫折し得、世界に類をみない、前段階武装蜂起の質をもった、革命的闘いに着手し得、世界に日本プロレタリア、人民の進むべき道を提示し得たのである。—中核派を先頭とする6・8派が現代カウチキ主義（口先だけの社会主義、実践は排外主義、労働者、人民の気分に応じ得ず、動揺する党派）の本質を暴露し、党派免罪符、運動「羽田闘争に至つたに比し」—さて、以上の総括的、敗北の教訓を踏えた上で、我々の任務の確定に移ろ。

我々の任務の指定は、総括結論からも考えられ、引き出される如く、

①党活動の基準となるべき、単一の世界革命戦争を経て、「世界プロレタリア」を準備すべき、「現代帝国主義—過渡期世界」の世界階級危機の性格、発展段階等（客体的要因）と、これを目的意識的に、「世界プロレタリア」に導く、「前段階蜂起（連続的）世界革命戦争」の実態的、「世界戦略の基本性格、構造、段階」の確定が必要である。

我々は、九月段階—SDSやSNCC、西独SDSに、「前段階蜂起」世界革命戦争の路線を要請した。そして、我々は、彼等が我々の路線を受け容れるものと、善良にも期待し、幻想をふくらました。ただ、日本の中核—諸派と違ふ点が、外国人であるという理由だけで、そして、この期待が打ち破られるや、意気消沈し、一国的視野に自らを狭めつたのであった。

このことは、「我々の戦略路線は、未だ、我々以外に実践者を見出していない」ことであり、「我々の国際的活動を媒介しない限り、我々の戦略路線は、国際的には拡大しないこと」という極めてわかり切つた真理に全く不徹底で、「我々が、世界党の中核として国際的活動をしなければならぬ」ことに於て、意識性を曇らせたのであった。

このことは、確かに「国境により、民族が相異なる」等の、客観的制約にあるのではなく、根本問題は、「一国的武装蜂起でも、何とかやれるのではないか」という、一國主義的幻想であり、「前段階武装蜂起が、唯一世界的武装力に於てのみ維持される」ということを、革命的に武装し切れていないか、こそあつたのである。

かつ、現代帝国主義の引き起す、階級危機からして、このような「世界的武装力」が、成熟しつゝあり、又、我々の党活動—国際的分派闘争を媒介に統合し得ることに對して、没主体的にしか、理解しなかつたことにある。

第二に、かかる「階級危機—前段階蜂起—世界革命戦争戦略図」の下に、我々の、「国際根拠地獲得—世界各国支部—軍隊造り」と、これと結びついた、「蜂起の軍隊建設」と「敵軍隊の解体」闘争の具体的活動を確定しなければならぬ。

第三に、以上からして、我々の「党内生活」の心樞をもつての、枠組—組織形態を確立することである。

第四に、党内外に於ける、間違つた諸傾向—諸偏向との闘い—内外分派闘争の組織戦術を定め直すことである。

これは、上文にも述べている如く、実態的なものでなければならぬ。「現代帝国主義の、反革命—侵略—抑圧—戦争への帰結からして、現在の三ブロック階級闘争が、世界革命戦争に於て、如何なる『防禦—対峙—攻撃』の局面を取り、これに向け、どのような世界単一の政治的、軍事的陣型に、現在の、自然発生の即目的陣型を再編成してゆかなければならぬか」に応えるべきものでなければならぬ。

当然にも、我々の、世界各国での、とりわけ、労働者国家の、軍隊建設—国際根拠地獲得闘争は獲得されなければならない。又、国際的、分派闘争—世界党建設の性格も、獲得されなければならない。

そして、次の日本前段階武装蜂起と日本革命の党活動も、そうである。このことについては、以下のことと合わせて確認しておかなければならない。

総括に於て、我々は、「一国的攻防の限界と、その限界の、国際的勢力を導入しての突破」という、「日本革命」という立場から、「世界革命に拘り合う」という観点と、「世界プロレタリア—人民の利益」という観点とを、混り合せて、総括を獲得してきた。だが、前者の立場は、我々を世界革命主義者に昂め、過渡であれ、これのみでは、本質的に「一國革命の波及論」—世界各國革命の寄せ集め、相互利用」の域を出ないものであり、一國革命主義と区別つかないものである。我々は、この媒介を経つて、決定的な飛躍を遂げるには、「根」—「こ」からの、頭部からの世界革命主義者になるには、「一國から世界との関係」を待つのではなく、「世界そのものから、一國を規定」—する立場へと転倒しなければならぬし、この転倒の杵こそが、「世界革命戦争」の「世界プロレタリア」に向けての、単一の有機的な「戦略図」であるのだ。そして、かかる「戦略図」に導かれた活動こそが、一國の革命の利益を普遍的なもの、武装蜂起に徹底させ、「党と軍事」という矛盾を、蜂起の質に於て、永続的に統合してゆくのである。正に、政治的、軍事的、組織的受動性、攻撃性に、首尾一貫昂めてゆくことができるのである。

「ナショナル」であることがインターナショナル」ではなく、「インターナショナル」であることがナショナル」なのである。

そして我々の、理論的、觀念的世界性を、これを導きにしつゝ、我々の存在する位置そのものを、世界的、単一なものに置くことである。

Ⅱ 防禦から対峙を結節せしめる前段階武装蜂起

—世界革命戦争の戦略図—

—即目的前段階蜂起の敗北と国際階級闘争—

即目的前段階蜂起は、昨六八年より、仏、独、日、先進国心臓部を襲つた。仏五月革命、西独非常事態法闘争、米黒人反乱、日本110/21闘争等々。

だが、この意味を、「侵略—反革命戦争前段階の武装蜂起として」把握し、指導する党派は存在しなかつた。そして、これ等の即目的蜂起に拘り合つた、先進国第三潮流の国際共産主義運動は、この半蜂起の闘争を如何に指導するかをめぐつて、根底的な分解を開始したのであつた。この分解は、六九年、日本安保闘争の昂揚と敗北の中で、現に深化しつつあるし、又、後進国—労働者—國家の共産主義者をも巻き込みつつある。

これらの国際階級闘争—国際共産主義運動の混乱に、概括的解答を与えようとしたものこそ、共産主義者同盟主催の六八年8/3集会（8/3論文）であつた。だがこの8/3集会の提起も、世界党—赤軍—革命戦線—世界革命戦争」の実践的環、「前段階武装蜂起—「国際根拠地」—世界分派闘争—世界党」の問題に立ち遅れることによって、六九年今秋安保決戦を前段階武装蜂起として貫徹する準備に大幅に立ち遅れを示したのであつた。

このことは、即目的前段階武装蜂起の爆発と敗北を機軸にして、国際階級闘争の流れを概括してみれば明らかになる。

米帝國主義の後退と、日、西独等、他帝國主義の興隆、これ等の抗争、後進国からの国際階級危機の進展は、遂に、米帝國主義をして、本格的経済的、軍事化を題材とする反革命—侵略戦争の拡大に踏み切らしめた。米帝國主義は、第二次帝國主義戦争、朝鮮戦争に続き、再び、「金融資本の慢性的過剰—経済的軍事化—局地的反革命—侵略戦争と一体の資本輸出」のメカニズムを全面化させ、その「イチジクの葉」である「ニューディール」体制を再編させ始めたのである。

ベトナム人民の反抗と革命戦争の前進、これらの後進国、先進国労働者国家への波及が、六〇年代後半、国際階級闘争を「米帝打倒」ベトナム反戦として一つ結びつけたのであった。日本、六七年10/8、11/12米反戦闘争、黒人闘争、そして、O.L.A.S.会議等、これらは、とりわけ、カストロ、ゲバラ路線の開花としてあったO.L.A.S.会議(六八年)に受けつづけた。キューバを国際根拠地として、米黒人、中南米、アジア、アフリカに第三世界の革命戦争の波を胎動させたのであった。と同時に、ソ連の「民族自治」議会主義路線や中国の「民族解放」非武装中立、米帝粉砕、周辺革命を破産させ、ソ連派の後退と中国の「文化革命」を世界革命戦略の破壊との関係で引き起した。この動向は西欧諸国に波及し、仏五月革命、西独非常事態法闘争の敗北を経て、東欧労働者国家のソ連への「反乱」と、ソ連の動揺として現象した。

だが、かかる現代帝国主義、過渡期世界の階級危機をめぐっての、革命的第三潮流(先進国グループとキューバ等)と、中、ソへの本格的分解も、O.L.A.S.路線が、「第二世界の革命戦争」として、限界をもち、帝国主義心臓部の前段階武装蜂起の貫徹に無自覚であることよって、かつ、先進国第三潮流が、安部-N.A.T.O.決戦即目的前段階武装蜂起の域を越え切れず、両者は結合し得ず、ともに敗北していったのであった。そして、広汎な戦局的、革命的な「自主独立グループ」の動向を分散させていったのである。これはゲバラの洩教、キューバの内政、経済再建への転換、先進国闘争、その「世界性」一國性、「党と軍事」の矛盾の深化として帰結したのである。かつ、中国革命の停滞、チエコの反ソ、ブルジョア民族主義への屈折、中ソスリ河衝突として、労働者国家を反動的に変質せしめたのである。

かかる三ブロックの国際共産主義運動を、右翼的に再編成しつつある根源こそ、先進国前段階武装蜂起の敗北的事態であることは言うまでもない。

即ち、ベトナム人民の英雄的革命戦争の起爆の流れが、先進国前段階武装蜂起の貫徹(O.L.A.S.等の国際根拠地との結合による)のコースが、結合し進展し得ず、両者が分離し挫折することよって、中ソの反動化、自主独立グループの分解として存在せしめられているのである。

だが、かかる、三ブロック階級闘争の敗北的事態は、世界革命戦争の発展段階の射程からみれば、歴史的に不可避でもあり、その限りでは、世界革命戦争の第一段階「防禦」から「対峙」段階への移行に於ける敗北に過ぎないの

共産主義の共同性を、その萌芽であれ、計画的なものにしようとするに於ても十分見受けられることである。

問題は、すべからず、地上の現実的階級闘争が、理念に突っ込み始めているのに対し、理念が現実接近し切れず、把え切れず、いないところにある。文字通り、国際共産主義運動の只中に於て、「前段階武装蜂起」世界革命戦争の準備と分派闘争が、世界的に計画的に開始されなければならないのである。かつて、我々が、共産主義者同盟第七回大会、そして7/6それ以降に於て、日本国内に於いて容喙なく推進してきた如く。

① 現代帝国主義の運動法則からして、帝国主義が不可避に、局地的反革命侵略抑圧戦争から全世界侵略抑圧戦争に行きつくことは明らかである。それが世界武装プロレタリアートにとって、先進国心臓部での敗北を経て、中ソの一国社会主義に從属しての体制間戦争に帰結するか、心臓部での前段階武装蜂起の勝利を損ねて世界革命戦争から世界プロレタリアートに引き継がれるかは、別にして、予見される限りでの帝国主義の動向は、米帝の、ベトナム朝鮮、中近東、中南米、アフリカ等、後進国全域に於ける、無数の局地的反革命侵略抑圧戦争、日帝の朝鮮、ベトナム反革命侵略抑圧戦争から全アジアへの戦争の拡大、そして西独帝の東欧、仏へのそれであり、これらが段階的か、一体的かは、予見されないにせよ、不可避に「労働者国家」を巻き込むこと、これを中心とし、他の英、仏等の帝国主義の動向を加えつつ進展することである。

英仏帝の没落の動向、この対極での壮烈な米日、西独の市場再分割戦が進展するだろう。だが、この新、旧帝国主義の市場分割戦の動向は、その内部に、経済的対立からして、決定的な、分裂、敵対の要素を極限化させつつも、慢性的過剰資本形成とその処理は、国際階級斗争の成熟段階からして、擬制的、一時的に、「侵略と反革命の不統一」を統一する、局地的反革命侵略抑圧戦争を、その暴力的解決形態として表現させ、矛盾を拡大させ、全世界反革命侵略抑圧戦争に進展するのである。

局地的反革命侵略抑圧戦争の推進という限りに於て、帝国主義相互は自らの利益を一時的に、対他帝国主義との抗争と国際、国内階級斗争への反革命を統一せんとするのである。だから、この局地的反革命侵略抑圧戦争に於ける「ゲモノー争い」、軍事的成果は、帝国主義相互の死活をかけた市場再分割戦の別

争の第一段階「防禦」から「対峙」段階への移行に於ける敗北に過ぎないの

この敗北とは、次より累積的に拡大する、局地的反革命侵略戦争、全世界侵略反革命戦争の階級危機、に対して「三ブロック人民が、「自国帝国主義打倒」安部、N.A.T.O.ワルシャワ粉砕「ベトナム革命勝利」前段階武装蜂起、世界革命戦争」を掲げ、世界「党」赤軍「革命戦線」に於て、単一に現実的に結合し、先進国心臓部での前段階武装蜂起に集中し、彼らをして世界革命戦争の第二段階「対峙」に飛躍せしめる。何故なら、第一に、米、日、西独等一流帝国主義、英、仏、老朽帝国主義は、自ら内部での抗争を激化させつつ、米帝国主義やナチス経済が、かつて第二次世界大戦で行った如く、現に、米帝国主義の朝鮮戦争や、ベトナム戦争で行っている如く、自らの慢性的金融過剰資本を、対外市場に投下すべく、「経済の軍事化」反革命侵略抑圧戦争のメカニズムに全面転換し、七〇年代をより巨大な多数局地的反革命侵略抑圧戦争の持続と、全世界侵略抑圧戦争を準備しつつあり、現段階の階級危機はその余震に過ぎないからである。

ベトナム反革命戦争、朝鮮、中近東、ヒアラ戦争、東欧危機等は増々水統化し、七〇年代を硝煙と血みどろの世界に変貌させるのである。そして、この累積する全世界のプロレタリア人民への災禍は「体制間戦争」前段階武装蜂起「世界革命戦争」の世界史的選択を、後者のものとするのである。

第二に、仏五月革命から始まり、今秋安保決戦に引きつづかれた先進国即目的前段階武装蜂起の波と、その敗北は、今秋の革命的共産主義をして、暫く、事態の核心に接近させ始めたことである。

旧来の「ロシア革命」「レーニン主義」の変質形態「世界恐慌階級危機」ソビエト運動の形成「権力奪取」の神話性と決別、「前段階武装蜂起」世界革命戦争への攻撃型革命への接近を開始せしめていることである。

これは、先進国に於て、「中央権力闘争」軍事問題「直接的な」ベネとして、根底的なレーニン主義の発展止揚へと向いつつある。他方で、米大統領選に對する、ベネと米反戦闘争の呼び、安保闘争に於ける、米10/15、日本10/21、米11/15、日本11/17の如く、あるいは、戦局的、革命的労働者国家の即目的支援活動等々の如く、世界武装プロレタリアートの、世界性、軍事性

の側面であり、その意味で局地的反革命戦争は一個二重の性格をもっているの

である。

現代帝国主義は、自らの過剰資本を、古典帝国主義の如く、「経済侵略」帝国主義強盗戦争」として発現せしめるのではなく、「反革命国家資本輸出」反革命侵略戦争」市場の獲得」民間資本輸出」永続戦争」として逆転して展開せしめるのである。

金融資本の慢性的過剰資本の処理は、その当初からして、反革命侵略戦争の経済、政治、軍事メカニズムをもつてのみ展開されるのである。

この内的構造と実態を、その基本点において把えてみれば以下である。

② 60年代において、先進帝国主義は、慢性的金融過剰資本を累積させ、かつての米帝国主義との世界市場に於ける再編成を要求している。だが、この金融過剰資本の慢性化からして、直線的に、かつてのレーニン時代の如く、市場分割戦を展開しはしない。

何故なら、経済の「資本の過剰」市場再分割」の直線的な政治、軍事関係への転化は、世界恐慌と帝国主義間強盗戦争を一挙に爆発させざるを得ないからである。

ところが、世界恐慌は、資本の運動法則からして、不可避でありながらも、かつての産業資本主義時代や大恐慌時代、古典的帝国主義時代と違って、資本主義的に解決するものでもなければ、資本家階級にとって利益になるものでもなくなつた。

現代帝国主義は、国内的市場を独占的に支配し、唯一国際市場の独占的支配に於て成長を遂げんとする金融独占資本をその根幹に存在させている。金融独占資本は、国内市場を、生産、流通、消費に到るまで、支配し、自らの生産し市場に比し、より過剰な資本を蓄積し、独占価格を獲得し、資本の過剰を慢性的な性格にかえた。そして、この慢性的な金融過剰資本をもつて、国際統一市場に於て、独占を拡大し、金融過剰資本を処理せんとするのである。この意味に於て、現代帝国主義の金融過剰資本は、すでに「世界市場」として「競争」を前提にしてのみ、その運動を持続し得るのである。

かつて、恐慌は、生産と消費の矛盾を暴力的に破壊し、有機的に高度化され

た金融独占資本を誕生させ、強化することに於て、最も資本主義的な資本の矛盾の解決形態であった。だが、かくて生長した金融独占資本によって、生産と消費の暴力的解決の恐慌は、最早や資本主義的解決ではない。何故なら、世界市場の一歩の崩壊と取組は、金融独占資本の国際的な存在様式を破壊し、一国的なものにするが故に、金融独占の運動は、長期的構造の停滞を引き起し、生産と消費の矛盾を解決することなく世界革命を準備するばかりか、その「生産と消費の矛盾」の本来の解決に帝國主義強盗戦争（帝國主義間戦争として限定されない）の一過程でしかないからである。

帝國主義国家に於ける慢性的金融過剰資本の処理をめぐる金融独占資本の競争としてその不均等発展とそれに伴う國際統一市場の統一性の不均等は、かつて國際統一市場を破壊し、29年恐慌を皮切りに、約10年間の帝國主義の停滞と革命と反革命の時代を現出した。そして帝國主義は反革命戦争を伴う帝國主義間強盗戦争に、金融過剰資本の暴力的処理を帰結させたのであった。

これ等の歴史的经验は、帝國主義者をして帝國主義にとりて、資本過剰の唯一の資本主義的解決形態が帝國主義強盗戦争以外にないことを認識させ、戦後大恐慌過程で確立した慢性的過剰資本の一時的迂回的解決政策——機構——管理通貨制とそれを基礎とする、この國際放であるところの國際管理通貨体制の創出によって、國際統一市場の不均等発展とその不均等性を統一的に発展させ、同時にこれを媒介に、過渡期世界に於ける世界史的プロレタリアートの成熟という条件のなかで、金融過剰資本の本来の資本主義的解決形態——帝國主義強盗戦争——の特異な発見様式——形態を創出せんとしたのである。即ち、國際——国内管理通貨制を楯としつつ、金融過剰資本の慢性化から起る世界統一市場の不均等発展の不均等性は是正とこの様式——機構によって倍加される金融資本のより一層の慢性的過剰化と停滞を、この様式の別の側面——迂回的對外市場投下及び市場分割戦の恣意的計画的メカニズムを、「経済の軍事化——國家資本輸出——民間資本輸出」として、一時的に解決しつつ、局地的反革命侵略戦争を永続せしめるのである。

米帝國主義は、戦後、自らの金融過剰資本の慢性的過剰と停滞を、朝鮮動乱を通して、経済の軍事化、國家資本輸出を推進し、民間の設備投資、技術革新を行いつつ、産業複合体制を整備し、過剰労働力を軍隊に吸収し、反革命軍隊

を全世界にばらまき、恒常的戦争状況を堅持するなかで、世界市場の支配を強めた。今、全ゆる帝國主義がめざそうとしているのは、かかる米帝國主義が推進した経済——政治——軍事コースであり、その体制である。産業複合——統制経済——反革命——侵略軍隊——反革命同盟——反革命共同行動」と永続的局地的反革命——侵略抑圧戦争こそ、現代帝國主義の運命であるのだ。

「蜂起の軍隊」は如何に建設

されていかねばならないか
——中央軍はどの様に建設されてきたか

< I > 前段階蜂起へのジグザグと〇〇武装占拠の決断

(A) 大菩薩峠の敗北

秋、安保決戦の内容を、どの党派をもが、「政治危機の創出」として提起してきた。だが、一般的「政治危機」など存在しない以上、共産主義者、党派にとっては、一般政治危機の自己目的の創出などあるのではなく、「権力問題」「武装」「蜂起貫徹」としてのみ展開、追求されていかねばならない。故に、佐藤訪米阻止安保決戦の戦場は、「羽田」ではなく、「霞ヶ関」であり、「〇〇武装占拠闘争」としてのみ追求されるのが当然である。

我々は、それを追求し、大菩薩峠の全員逮捕をもって、敗北した。（前段階蜂起——その敗北と教訓）（参照）

そして、その大菩薩峠の全員逮捕として現われた敗北の根拠は、我々の組織そのものの未成熟故に求められなければならない。「蜂起は技術である」以上、方針の設定から、全員逮捕に至る全過程の技術問題（連絡——指令——集合、方法。

t c) 第一に点検しなければならぬ。

だが、大菩薩峠時点に於ける技術問題をアレコレと詮索したとしても、根本問題は解決されない。何故なら、遂行、貫徹されるべき戦術は、その組織の性格に規定される。勿論、その組織の性格は、革命論に規定される。故に、我々が他党派に比して、「霞ヶ関」(〇〇武装占拠闘争)を提起したのは、その革命論の結果であり、そして、それをなした切れなかつたことは、その戦術を、技術問題も含めて貫徹しようとする主体、組織に我々がなした切れなかつたこととして総括されねばならない。とりわけ、その戦術を実践的に担う軍が如何に建設され、今後どのように建設されていかねばならないか、ということである。

(B) 大阪戦争——9/30——10/9——10/10——10/21

大阪戦争の獲得目標を我々は以下に設定した。7/6以降、はじめて実践過程に独自に登場することによって、秋、前段階蜂起の実践的潮流を形成するための開始として、そしてその第一の内容は、4/28で敗北し、敵権力に解体、粉碎されつつある、全共闘、地域共闘運動を、防衛運動から、敵権力解体運動への攻撃的組織へ飛躍させること、第二は、この実践を通じて、かかる実践に不可決とある大衆末端までの軍団化をはかることであり、そして、それが単に、大学私兵たるとどまらせることなく、地区軍団として再編させてゆくこと、第三は、我々その中央軍を武装したもとして建設してゆくこと（武器の準備、〇奪取）、第四は、中央軍の武装準備過程を、蜂起の象徴過程として展開してゆくこと、第五は、大衆の敵権力解体運動の蜂起への集約を図り、それ故、我々の中央軍——地方軍地区軍の軍体系を形成してゆくこと、以上であった。だが、実際、運動としてやり切れたこと、9/13事前強庄もあって〇〇襲撃のみであった。

この時点で、総括したことは、第一に、中央軍の建設——蜂起への準備は、大衆運動の延長線上に於いて、ないしは、その頂点に於いて展開しようとする限り、その自然発生性に不断に振りまわされる結果となり大衆運動とは全く分離した、蜂起の展望から演エキした、独自の運動形態が与えられなければならない

ないこと、第二に、大衆闘争そのものが、全て、軍事闘争に入っている以上、大衆闘争の展望そのものが（全共闘部隊の大阪天王寺への結集——騒乱）、大衆末端までの軍団編成を不可決とし、それ故、地区党——S K活動の日常的蓄積の如何が、それをなすか、否かの環であること、ほぼ以上の二点に集中し、総括しつつも、第一の点については、秋の蜂起への具体的展望が明確にされず、又、第二の点については、大衆の敵権力解体闘争と蜂起の結合環が何であるかがはっきりさせられないうままに、革命的政治闘争の展開（地区軍——中央軍候補によって）等々を提起しつつ、9/30闘争に突入した。

そして、その結果は、大阪戦争の時と同様に、〇襲撃をなしただけであつた。第一の総括の軸は、中央軍の独自闘争として提起した〇奪取闘争の敗北である。大阪——9/30と、三度なされなかつたことは、その戦術設定自身に根本的誤りがあること、即ち、その戦術遂行は、中央軍が、テロ集団化しない限り不可能であり、水のない魚としての軍隊ではないこと。故に、中央軍は水を与えなければならぬ。大阪戦争——9/30で全面的に開始された大衆の敵権力解体闘争と結合した、蜂起へ向けた中央軍の独自の闘争が展開されなければならない。一言で言うなら、開始された敵権力解体の大衆闘争の頂点に於いて、蜂起へ向けた軍事闘争を展開すること。

即ち、秋、前段階武装蜂起という政治戦略と、現時点の、敵権力と大衆の彼の軍事的力関係が、まだそれに至っていないという政治戦略と軍事戦略の乖離の時点に於いては、蜂起の戦術をア・ブリアオリに提起したとしても、実現不可能である。

中央軍は、大衆の敵権力解体闘争の頂点に立つて、敵の前線基地本部をセン滅してゆくこと、そのことによって、敵権力の軍事的包圍網を、突破しつつ、中樞権力地帯に追いつめられてゆくような、実体的、大衆的な蜂起への歩を進め、政治戦略と軍事戦略の乖離を止揚、統合してゆくべきではない。この下に、中央軍——地方軍——地区軍の系列を確保していかねばならない。以上の9/30の総括の下に、10/9の9/30によって開始された敵権力解体闘争を更に前進させ、10/21より、大衆的蜂起の闘争として、自覚的に開始させることを路線化させた。そのことを、10/9——10/10、神田戦争、10/21新宿——

首都制圧―首相官邸へと表現した。

(C) R G ↓ 中央軍・地方軍 ↓ 蜂起の軍隊

以上、9/30―10/21に於いて想定している蜂起の道は、各地からの全人民の敵権力解体闘争―軍事的拠点の確保―権力の包囲網の粉碎―内バリへ追いこめること―追い込めた後での、そこでの正面戦―蜂起として提起している。これは、7/6以前に提起した、〇〇名による中樞権力の占拠―大衆の決起―占拠戦士との結合という前段階蜂起のそれとも、全く異ったものとなっている。

この転換の根拠は、何よりも、前段階蜂起貫徹後の展望―永続性と世界性―世界党、世界赤軍―について、理論的、実践的に明らかにすることができず、それ故、前段階蜂起が一国的展望に於いてのみ追求され(例えば、国際会議に對する無方針性)、その勝利への道の立脚すべき地点が、全て、大衆の力の深さのみに頼らざるを得ず、軍と大衆、軍事闘争と大衆闘争ということが、総括の基軸点になって、9/30以降、上述した蜂起の道を展望していったのである。(詳しくは、「前段階武装蜂起―その敗北と教訓」参照)

10/21、我々の未登場(〇〇の不発によって)によって、大衆的武装蜂起の道は断たれた。にも拘わらず、安保粉碎―佐藤訪米阻止の波が、「政策阻止」闘争の地点であれ、形成されている以上、その大衆の阻止の戦術と、〇〇武装占拠闘争を確定し、全て、その活動に集中していったのである。

それを決断させた第一は、「前段階蜂起―世界革命戦争」の革命論の下の「革命的敗北主義」であり、第二に、それを支えていったのが、国際的根拠地として、革命の永続性、世界性に解答を与えていったことにある。そして、このことは、蜂起は客観的には大衆闘争の延長線上に存在するとしても、その大衆闘争の自生的発展に頼ることはできないのであり、蜂起への飛躍と持続は、「世界革命戦争―一國蜂起―武装」として、準備されている党―軍によってのみ可能となる。ということの意味している。

我々の軍建設は、とりわけ、9/30―10/21にかけては、「世界革命戦争―一國蜂起」の軍隊としてではなく、大衆闘争の延長線上にあるそれではないか

ら、押し進めていかねばならない。

そして、それは、単に、蜂起の軍として建設すれば良いという問題ではなく、党―軍―革命戦線の相互的関連性の中で再度把えかえねばならない。いにかえるならば、かかる軍を建設してきた、党―軍―革命戦線の関係をはっきりさせていかねばならない。

II <> 党―軍―革命戦線

(A) 世界と一國の矛盾を止揚する党

我々は、過渡期世界に於ける党建設の環として、世界と一國、軍事と政治の矛盾を止揚しうる党として問題を核を提起してきたが、その最大の表現である、前段階蜂起の永続性と世界性に解答を与えるのに、10/21の敗北を待たねばならなかった。

10/21以降、「前段階蜂起―世界革命戦争」という、我々の最低の一致点とその体質としてある「革命的敗北主義」が、〇〇武装占拠を決断させ国際的根拠地―世界革命戦争―一國蜂起―武装」という新たな地点に我々を飛躍させた。

だが、大阪戦争―9/30―10/21に於いて、不断に我々に浸透してきたのは、「一國主義」であり、大衆運動主義である。この下からの自然発生性と、我々が如何に闘ってきたかこそが、「前段階蜂起―世界革命戦争」に至る、党建設上の環である。

そして、9月―10/21までは、我々は、不断に、その自然発生性に拝跪して行く過程である。

その第一は、国際会議に對する対応である。結論から言えば、無対応であり、なおかつ、日本で突破口を切り抜かない限り、現段階にあっては無意味である。という、一國主義の論理化までに至ったことである。

この根拠は、「前段階蜂起―世界革命戦争」が、「日本の前段階蜂起をもつ

つた。

7/6以前のR Gは、文字通り、突撃隊としての、党の一機能としてしか位置づけられていなかった。党が組織する大衆闘争の先頭に起つものであり、党が組織する集会の宣伝隊であり、会場防衛隊でしかない。即ち、軍事が党の一機能であり、それを担うゲバルト隊としての意味もかちえなかった。7/6以降、「前段階武装蜂起―世界革命戦争」が、党―軍―革命戦線の下に開始した軍建設は、中央軍―地方軍―ゲリラ軍の系列をもって軍事闘争の時代は開かれること、何よりも、中央軍建設から着手されねばならないこと、として開始された。

それは、毛沢東―グエン・ザップのほび引きうつしである。大衆闘争、革命的政治闘争の頂点での軍事闘争。ゲリラ軍―遊撃軍―武装宣伝隊―半正規軍―正規軍。中央軍―半正規軍―正規軍。地方軍―ゲリラ軍―遊撃軍。革命戦線部隊―革命的政治闘争、等々として。

そして、決定的にしたのは、大阪戦争―9/30闘争に於ける、中央軍の敗北から、軍事の一人歩き、戦役主義、テロ集団化なるものと、批判し、蜂起へ向けた、軍の独自建設を放棄し、大衆闘争の頂点での軍事闘争、その軍隊へと墮落していくのである。

勿論、中央軍を否定することなく、中央軍候補等を地区から挙げて、その建設を第一目標に、我々は依然として設定はしていたけれど、実質的には中央軍の解消である。

即ち、10/21―佐藤訪米阻止、〇〇武装占拠に向けては、即ち革命戦線は関係なくなり、全て、その戦術を表現する、軍建設へと集中した。だが、それは、第一に中央軍と新入隊員を無差別に編入していくことによって、この一ヶ月によって養われた、軍の規律性、組織性は解消され、第二に、その結果点が、「世界革命戦争―蜂起」の軍隊としてではなく、せいぜい「安保決戦―前段階蜂起」の軍でしかなく、それ故、行動のイメージで結集させようとして、当然、権力との関係では、合法ボケした軍事組織しか形成できないのであり、大菩薩峠は、かかる意味において、必然であったのである。

即ち、大衆闘争の頂点での軍事闘争、ないしは、蜂起は、その飛躍―持続の爲にも「世界革命戦争―一國蜂起―武装―世界党―世界赤軍」というところか

世界革命戦争へ」という、日本革命の実体的道すじをそのまま、無自覚であれ、世界革命戦略へ高められてしまっているところにある。そして、7日―米前段階蜂起というかけ声も、ただか、日本の前段階蜂起を助ける「意味に於いてしか考えていない。そのことが、国際会議にあっても、米に行つてのオルグ活動の具体的展望が出しえづにいるところ等々に現われている。

何よりも、世界党建設の問題は、仏―独―米―日の先進国、ヴェトナム―中国諸国、後進国、チエノ―中国―ソ連の労働者国家、そのすべての階級闘争が、帝国主義の侵略―抑圧―反革命戦争の全面的開始の時代にあつて、前段階蜂起―世界革命戦争へ成熟しつつある以上、世界的分派闘争を組織してのみ、世界党は建設されていくのであり、そのことに何らかの形であれ着手しない限り、世界党建設の展望は切り拓かれぬ。その作業を抜きにした、前段階蜂起の組織は、当然一國主義にならざるを得ない。この一國主義は、当然、前段階蜂起の永続性を、一國的大衆の力に求めざるを得なくなり、大衆運動主義に拝跪していくのである。

(B) 政治―軍事

7/6(仏―さざぎ)問題を、我々は、軍事の一人歩き、軍事の自然発生性に拝跪したと総括し、何よりも、過渡期世界に於ける党建設の環を、軍事の自然発生性ととの闘争、その止揚こそが、それであると設定した。

軍事と政治の対立が、あたかも、軍事闘争の大衆闘争の対立、軍と革命戦線の対立かのように錯覚し、9/30(〇〇奪取闘争―軍事の一人歩きと総括)―10/21の過程を、更に、大衆運動主義への傾向へと深めたのである。9/30の総括を大衆闘争の頂点に軍事闘争があること、そして、軍の生成は、ゲリラ戦―遊撃戦―武装宣伝隊―半正規軍―正規軍としてあること、故に、革命的政治闘争の展開、等々の主張は、その現われであり、完全に下からの党建設論に陥っている。

問われていた問題は、大衆闘争の末端まで含めて、軍事的闘争の時代なのであり、10/8―昨年の10/21までの、党派の軍団―大衆という、系列から党派の軍団―大衆の軍団という、軍団と軍団との系列こそがそれなのであり、我々

の中央軍の政治的武装とその質に於いて、それがなし遂げられていかねばならないのである。即ち、大衆の敵権力解体闘争と、我々の蜂起によって、如何に大衆と結合するか、こそが根本問題なのである。

P B / C P O の骨格こそが、軍一政治の永続的矛盾を止揚すべきものとして提起してきた。

だが、C P O が組織する革命戦線とC A O が組織する軍との対立、及至は、矛盾は、政治と軍事の矛盾にあるのではなく、軍建設に対する、革命戦線からの必然的に発生する経済主義、地方主義、大衆運動主義、一方、軍に於いて発生する程度の戦役主義、その裏返しとしての大衆運動主義、(孤立した活動の中から必然的に発生する)との交差して、全体として大衆運動主義になることこそが、革命的問題なのである。

第一は、軍の建設、拡大再生産の構造である。軍への供給ポンプは、当然、C P O 地区党一革命戦線である。だが、C P O 地区党の活動が、組織的に展開されるためには、中央軍がそれなりに、大衆的に登場しておかなければ、その活動は保障されない。単純化して言うなら、我々の根本的党派性としてある中央軍が、大衆の前にカッコ良く登場してくれない限り、その組織活動の果乗化は進まない。ここから、不断に、中央軍の先頭に起つことが、下からの要素として発生する。

第二は、軍へ入隊することに踏み切れない諸々の活動家層を如何にして組織するか、として不断に地区党指導部は問われる。彼らは、赤軍を支持する、しかし、自分ではできない、だが少しは活動したいという部分である。旧来の感覚から言えば、この部分に対する運動形態を提しないう限り、地区党活動がないかのように錯覚せざるを得ない。

第三は、不断に学園闘争、職場闘争が発生する。これに対する方針を持たねば、大学は獲得できない。

第四は、軍候補になりうるメンバーは、地区活動に於いて最も優秀な部分であり、彼らが軍に入隊したら、地区活動が停滞する。

そして一方、軍の方は、それ自身の運動としては、拡大再生産されない以上、その活動のパロメーターは、一つは戦役であり、二つは革命戦線一地区党

↓C P O を経ての入隊者の増加となり、より多くの軍への入隊者を募るためには如何に、ということが気持の支えになっていく。

かくて、ここから、革命戦線一軍一党という、下からの論理が構造化してしまふ。そして、それ故に、増々、大衆運動主義に陥り、陥れば陥るほどに、軍の増加はないという悪矛盾に確実には落ち込んでしまふのである。

前段階蜂起ということが、具体的政治戦略に掲げている時点であって、地区の小さな闘争に関り合いながら、それを逃げることも自身が誤りなのであり、他々の小さな闘争に対しては、中途半端な権力との衝突を行なわないで、全て、蜂起に集中する様に(軍団つくり)指導しなればならぬのである。

かかる意味に於いて、我々が、この時点で闘争すべき対象は、未だ古い活動経験と活動スタイル、経験主義、地方主義、大衆運動主義との闘争であった。かかる中で、政治と軍事の矛盾、軍事の自然発生性は、世界革命戦争一前段階蜂起に向けての、政治的、組織的核心点である、世界党一国際的根拠地問題に解答を与えていないことから、一国主義に至り、軍の戦役主義(孤立から、一発の戦役で登場しようとする発想)が、地区党一革命戦線の大衆運動主義と結合することによって、9 / 30 / 10 / 10 の無計画、準備不足な闘争を展開しようとしたところであらわれている。

(C) 党一軍一革命戦線

革命戦線一軍一党から、世界党一世界赤軍一世界革命戦線に転倒させていかねばならない。

世界党一国際的根拠地建設は、(日本の)前段階蜂起一世界革命戦争からではなく、世界革命戦争一蜂起、武装として、世界的に煮つくり、成熟しつつある。各国前段階蜂起一世界革命戦争を領導しうる世界的分派闘争を目的意識的に組織することをもって、その第一歩を踏み出さねばならない。かくて、形成される国際的根拠地と結合した軍建設を展望していかなければならない。(P B) を軸とした組織活動の各国への重点配置)

そして、下からの党建設、軍建設に拜跪せざるを得ない、大衆運動主義の発生の根拠が、第一に世界革命戦争一蜂起に支えられた、世界党一国際軍事根拠

地と結合した軍建設の欠如した一国主義にあると同時に、第二には、一国主義がもたらす、軍の戦役主義と、旧来の地区党活動の経済主義、大衆運動主義との結合による以上、国内組織の徹底的な体質改善を展開してゆかねばならない。軍人は、党人の養成、党の全国化、中央集権化の同時一体的進行をなさなければならぬ。

党の骨格となる党員は、基本的に軍を経て党員になるという構造を確立しなければならぬ。かつて、古い我々の党は、革命戦線の活動から、地区党を経て、地区c a p へという構造であり、地区党は不断に維持されねばならないところから、地区c a p がほぼそのまま固定化されてしまっている。

この欠陥の第一は、地区のせいまい経験が、そのまま地方的にその地区に蓄積されてゆき、地区党が増々、経済主義、地方主義をはびこらせること。第二に、遂に、各地区の経験が普遍なものとして中央に蓄積されてゆかず、中央一軍一地区党の分解を生んでいくこと。

それ故、革命戦線から、軍へ一軍から一定の諸活動を経た後、出身地等々を考慮せず、その能力に応じて、各地区一各細胞に配置し、全国化を図ってゆくことによつて、党の全面化と中央集権化を築いていかなばならない。

以上の骨格が、保証される為には、当然、世界党一国際的根拠地と結合した軍活動が保障されてこそ、はじめて可能になるのであり、このこと抜きには、蜂起の軍隊も建設されない。

II 蜂起の軍隊建設

(A) 世界革命戦争一前段階蜂起

蜂起の軍隊は、確かに、大衆斗争と無関係に建設するわけではない。グエン・ザップにしても、又、毛沢東にしても、最も強調しているのが大衆が主であることであり、あくまでも、大衆斗争の頂点での軍事斗争であり、軍建設にあっては、ゲリラ戦一遊撃戦一武装宣伝隊一半正規軍一正規軍として建設されてくることを歴史的に証明している。

にも拘らず、我々は、大衆運動から、全く分離された国際的根拠地と結合した軍建設を、蜂起の軍隊として自己目的に建設していくことが、主要環であるとして総括している。

大阪戦争一9 / 30 / 10 / 21 に、グエン・ザップのアテハメをもって、大きく、軍建設するのには後退を余儀なくさせている。

第一の誤りは、毛沢東、グエン・ザップの長期にわたる歴史的総括の理論を、そのまま、半月一ヶ月の尺度に於いて、アテハメヨウとすることが、土台無茶なものであり、

第二に、10 / 21 / 11月佐藤訪米阻止斗争に煮つまる、プロレタリアートとブルジョアジーの攻防を、蜂起貫徹としてのみあるとする我々の理論からすれば、昨年の10 / 8 / 10 / 21 / 東大斗争一4 / 28を経て、秋をその一つのプロレタリアの歴史の成熟段階として把える必要がある、それ故、ゲリラ戦一武装宣伝等々とか、ないしは、大衆斗争の頂点での軍事斗争は、この過程に於いて煮つまった歴史的一段階として把え返さねばならないこと。云いかえるならば、大衆の末端まで軍事的斗争の時代に突入しているものであり、大衆との新たな結合は、唯一、蜂起を貫徹する軍隊をもつてのみ可能であること、それ故、蜂起へ全て集中することである。

第三は、いわゆる、防禦一対峙一攻撃的なプロレタリアートの攻防の理論も、グエン・ザップ、毛沢東の様に、一国的規模に於いて展開されるのではなく、我々にとっては世界的プロレタリアートとブルジョアジーの攻防の関係で論じられること。即ち、帝国主義の侵略一抑圧一反革命戦争となし崩しファシズムの攻勢に対して、世界プロレタリアートの対峙一攻勢への方向は、唯一、各国の前段階蜂起一世界革命戦争としてのみあること。

この防禦一対峙一攻勢の論理を、我々は一国的規模に於ける、敵権力と我々の軍事的力関係に於いて、把えることによつて、その攻防関係から自ら、軍事力主義の対応より、逆に、ズブズブの大衆運動主義に転落していった。

以上からして、我々は、大衆斗争一軍事斗争、ないしは、大衆斗争の頂点での軍事斗争、等々に、以下の如く決着づけねばならない。

第一に、大衆斗争の成熟、その頂点での軍事斗争については、我々が目的意識的に組織してきたか、否かは別にして、一昨年10 / 8以降、4 / 28の党派の

軍団による軍事的斗争—大衆斗争が、充分に成熟してきていること。如何なる小さな斗争も、軍事的斗争としてしか推進しえない時代に突入していることとして明確にすること。

第二に、仏五月革命、米のB.P.P.の運動等々は、自然発生的であれ、前段階蜂起まで成熟させたことをハッキリさせていること。

第三に、従って、全ては、蜂起に集約させることをのみもってしか、現在は、大衆との結合などはありえないこと。云いかえるなら、かつてのごとく、焼香、テモにジグザグ等々を対置することなく、一つ一つの斗争に於いて、党派性を表現しようとする時代は終了したこと。

第四に、学園斗争であれ、経済斗争であれ、個別斗争は、これからもいくらかでも、続発すること。しかし、それは、これまで如く、その斗争の徹底化のみ党派性を競うことは誤りであり、党一軍の構造を基本的に確立した上で、蜂起へ全て統合する新たな活動、組織形態は、別個に打ち立てられねばならないが、それは、唯一、党一軍の基本骨格がすえられる過程で、経験とその普遍化によって解釈していかねばならないこと。

第五に、蜂起に全てを集中するということは、権力と大衆という、ブルとプロの攻防に、党が介入しつづ、ヘゲモニーをとるという構造から権力—赤軍の攻防が全階級斗争を担うということ、極論するなら、赤軍派の主体的準備が全て人民の準備でもあるという構造をつくり出すことであり、それ故、蜂起への活動もは、軍建設であり、革命戦線の諸活動も、その軍建設に向けて集中する様に行動換えられねばならないし、大衆に対しては、蜂起—軍建設へ全て従属させる様な組織活動をしなければならぬのである。

このことは、4/28以降、10/21や、4/28と五派—八派がつくりだしてきたように、蜂起への諸情勢を単独で赤軍がつくりだすのであり、それ故、それは、他党派との分派斗争、党派斗争を媒介にした党派解体運動と軍建設運動になるのであり、又、そのことを通じてのみ、「世界革命戦争—蜂起」の世界性で武装された軍隊建設がなされる基礎になるのである。

第九に、同時に、武器をもつて大衆同時結集していることが不可能な以上、平時は、分隊—小隊単位で行動し、その集合—分散の臨機応変な対応ができる。組織性、規律が養われることが根本問題である。

(C) 軍に現われる自然発生性

その第一は、戦役主義である。大衆運動から分離されて孤立して存在する以上、日常不断に、自己の存在が確かめられず、必然的に何かの戦役を挙げることによって、という志向が不断にわく。

第二は、この戦役主義は、①その自己閉鎖性と結合して、テロ集団化する方向と、②革命戦線の経済主義と結合しつづ大衆運動主義に流れるという、二つに分解していき。

第三は、「世界革命戦争—前段階蜂起」への計画的組織的活動が欠落すると、必然的に、戦役主義に陥り、なおかつ、これらは極度の戦争主義に至っていくこと。最小犠牲、最大効果、がバックラレル様な斗争はしない。になり、グヒット・エント・ラング方式の積み重ねにのみ、革命を展望していくこと。

第四は、党の傭兵になりがたが、その軍が単に、党の傭兵となつた時には、逃亡、強奪等々は、日常不断におき、その軍は、確実に解体する。第五は、個人主義である。重要な計画を遂行する時には、絶対に個人活動を許してはならない。何よりも、これを克服するためには、第一に国際的根拠地と結合した「世界革命戦争—前段階蜂起」に至る、細部にまでわたる具体的計画が不可欠であり（逮捕された時の心得まで含めて）、第二に、軍内部に於ける政治、軍事、財政の民主主義は絶対に保証されねばならず、それら全てを、とりわけ財政—基本に、自ら担う意志統一をしなければならぬ。

第三に、それを保証する、軍の内部に、規律をつくらねばならず、戦時体制の命令、指導系統のみならず、政治委員は、確実に隊内から選出、設定しなければならぬ（学習会活動は基本である）。第四に、軍内部に、党グループをつくり、そこでのSK活動が、最も重要な位置を占めることである。

(B) 蜂起の軍隊とは何か

第一に、世界革命戦争—前段階蜂起で武装され、世界党—国際的根拠地と結合した正規軍（世界赤軍）であること。

第二に、このことは、当然、人民戦争軍隊とは全く違うこと。人民戦争軍隊にあっては、その基本的戦術は、グヒット・エント・ラング（最小犠牲、最大効果）である。確かに、最小犠牲—最大効果は、軍事作戦上に於いて、最も留意すべき点ではあるが、我々のそれは、個々の軍事上の戦術に於いて問われるべき性格ではなくて、唯一、世界革命戦争—蜂起貫徹—戦争勝利の徹底的展望に於いてのみ、その代価があること。

第三に、云いかえるなら、世界プロ独へ至る、世界革命戦争勝利の展望は、唯一、世界党—世界赤軍の強化にのみ、その活動が凝縮されていく以上、その飛躍と発展のみに、自己の生を期し、死を覚悟していくことが問われること、それ故、党への信頼と献身のみが、英雄的活動を養成すること。

第四に、正規軍であるというの、かかる意味に於いて使用するのであり、それを、大阪戦争—9/30以降、戦術形態によって、ゲリラ軍、ないしは、半正規軍等と使用することは、事態の混乱をまねくだけである。

我々は、当然、軍事作戦上の問題として、敵を分散させること等々のために、当然、ゲリラ戦術も使用するのであり、正規軍による戦術形態は蜂起にむけて、諸々である。

第五に、軍隊である以上、可能なあらゆる武器をもち、それを使いこなさなければならぬ。

第六に、なおかつ、この軍は、戦斗だけが活動だけでなく、武器の調達等々の丘立活動、戦術作成等の全てにわたって、こなし切れる全ゆる機能をもたねばならないこと。

第七に、それ故、その日常活動は、世界革命戦争—蜂起—武装への計画的な戦術遂行のための諸準備活動（資金、武器、通信交通）がその中心になる。第八に、それ故、前段階蜂起に向けての、画期的計画が、今から準備されねばならない。

(D) その実践的教訓

①我々が戦術を作成する時、確実に遂行し戦役を挙げるためのそれは不確定要素としてある、群衆の行動に頼らざるを得ないような戦術は追求しないこと。確かに、群衆、大衆の動きは、敵権力を分散させ、我々を隠す等々に於いて巨大な武器であり、それをなくしては、勝利はあり得ないけれども、前段階蜂起貫徹までは、それはあくまで、補助的であり、文字通り群衆なのであり、軍事作戦上の対象としてではなく、群衆として扱うことが肝要である。群衆—大衆に重要モメントをおいた戦術は、確実に我々を大衆運動主義に追いやり、それ故、軍隊は墮落する。大阪戦争—9/30—10/10—10/21、全てしかりである。

②10/9の小松ホテル、大菩薩峠の全員逮捕は、指導部の不決断によるものである。一方に於いて、権力の動向がハッキリして、他方、現地からのハッキリした報告が、まだ入らないとしても、そこで権力と衝突すべきでないとしたら、すぐ引いて、次の戦術、計画に移らねばならないし、戦術計画を立てるときは、それが、可能な余裕をもったそれを作成しなければならぬ。③指令—報告は、決められた時間に、決められた方法によって確実に遂行されねばならない。絶対に個人で判断して、つまらないと思っても報告しなければならぬ。小松ホテル、大菩薩峠は、確実にこの怠慢に因がある。集合員分散、指令員報告は、隊員の習性として養成していかなければならぬ。

④10/10、10/21も、そうであったが、戦術の民主主義を下から要求してくる。自分が、どのような位置で、何をするか、現場にいくなからぬといふことを不満として噴出させる。これを、そのまま、決して迎合してはならぬ。

唯一、そのことを可能とする、それをなしうる組織（日常的に担えられた）—軍に於いてのみである。又、軍にあっては、一度、戦術を決定し、遂行しようという段階に入ったら、どの様なことが、あつても個人活動を許してはならない。（女房、友達に、何の気なしに言うことが拡がっていくものである）⑤かくて我々は、大阪戦争を経て、建設した中央軍、その献身性、革命性となつていく。

その英雄性も、伝統として受けつぐ軍に建設していかねばならない。

法廷に公然たる武装宣伝を

Ⅰ 我々の到達した地平と獄中同志の位置

今秋安保攻防を、前段階武装蜂起—世界革命戦争の下、不屈の決意と鮮血の献身性をもって、その最前線を闘い抜き、混沌する世界武装プロレタリアートの前に断固として応えんとした我が赤軍派の革命的同志諸兄、革命的戦士諸兄、

一切の諸派が10/8闘争の自然成長的・大衆的政治過程に拝跪しつつ、その外延長上に機能主義的のみ、部分的軍事を接木すること、只々、党派としての免許符のみを奔走せんとしていたその時、我が赤軍派とその英雄的戦士によつてのみ担われんとした蜂起の準備とその挫折は、11/5大菩薩峠なる、その場所的・時間的規定性を超越し、全世界・全日本プロレタリアート、人民をして痛烈なる衝撃と、安保攻防に表現された七〇年代の蜂起—革命戦争のリアリティを、そして彼等の真に為すべき任務をその深淵にうごめく重みと痛みをもつて叩きつけずにはおられなかった。よしんば、それが商業紙に依る悪意と偏見に満ちたセンセーション・ナリズムを呈したにせよ、又、如何に巧妙なる大衆愚弄に基いた「万才主義者」の大衆操作、組織操作技術による空疎な強弁の氾濫があったにせよ、今秋安保攻防の主体が誰であり、何が敗北し、如何なる主体こそが七〇年代の蜂起—革命戦争を貫徹し得るのかは、余りに鮮明なる解答を啓示したのだ。

我が赤軍派とその英雄的戦士により貫徹せられた蜂起とその一切の諸準備こそ、現代過渡期世界の課題の核心と、その内的矛盾構造を最も集中体現するが故、又、その敗北も優れて悲惨であり、かつその止揚の材料を最も排出したのだ。我々は、蜂起の決断に於ける、又、戦術・方針に於ける曖昧性を、そして、それらの対象化過程に於ける日和見主義等に基因した敗北は怖れ

ることはあったにせよ、敗北一般を怖れたことは決してなかったらう、確かに我々は敗北したし、一切の陰湿なる弁明は醜く、又、矮小である。

—又一方、確かに十一月蜂起は貫徹されるべきであったし、そのための同志諸兄、戦士諸兄に依る一切の献身性は結実されるべきであったらう。だが、同志諸兄、真に自明のことながら、敗北一般が問題ではなくして、その敗北の事実からの総括—止揚の過程こそが一切の問題の整理の環なのである。

この間の日本—世界階級斗争は、六七年10/8の羽田に始まり、極めて皮肉ながらも、それは再び二年間の周期を経て羽田に還つていったのだ。否、むしろ我々を除いては、彼等に於いてそうすることしか為す術もなかったというべきであらう。悲しいかな、この一片の現象に於いてすら、現代過渡期世界に於ける多様な諸派の隔るべくして隔つた問題の本質性が全面露呈しているのだ。同志諸兄、戦士諸兄、我が赤軍派、とりわけ、その最も革命的、英雄的中核部分たる諸兄と我々のみが、現代過渡期世界を止揚し得るし、その具体的表現たる蜂起—革命戦争を貫徹し得るのだ。それ以外の何ものでもない。我々は、その事実を誇らんと七〇年代世界武装プロレタリアートの前に宣言しようではないか。そして今秋前段階蜂起—敗北の総括と教訓を深化しつつ、只々、我々の未熟性と、それを克服すべき蜂起の永続性—より強固な非合法党建設・建軍運動—国際根拠地の確立、そして再度の蜂起の準備とその貫徹に向け、一切を集中しようではないか。問題は、それ以外の何ものでもないのだ。

Ⅰ 獄中—救対活動—そして裁判は如何にあるのか

① 党建設と獄中

既に、11/5以前の9/30事後逮捕等に於いて確認された如く、我が赤軍派同志、戦士諸兄の一定数が今日の救対活動の客観的困難性等々に媒介されながら、獄中に在って所謂消耗し、事実、組織関係一般を自供するという事態が悲

しいかな現実存在している事実を、我々は痛魂を以て告白しなければならぬ。この事実に対する我々の原則的視点は、一切の迷いなく以下の問題として、整理—総括—止揚されなければならないと考える。即ち、真に我が赤軍派の軍事を指導し得る党建設に於けるその未熟性、自然成長性に基因した党総体(組織力 etc.)の弱さとして、獄中同志諸個人内部の主体的脆弱性、及び救対活動の不充分性、手工業性等の一切は整理されるべきであり、組織の弱さか、個人の弱さかの悪循環の内化過程に於ける、組織不信一般や、陰湿なる倫理的自己嫌惡の総括は一切不毛であると考え。要は、その悪循環の内化過程に於ける、組織が、個かの負として、相互媒介関係に於ける未熟性—党組織総体に於ける脆弱性の事実に対して如何に克服していくかの、有としての相互媒介関係として、組織が、個かの問題の整理されるべきであり、又、その中心環として、その事実の相互媒介関係の具体的表現たるジャンル—緊張関係を不滅のエネルギー源とした主体に於ける、かかる党建設への不屈の意識性が問われるのである。

Ⅱ 党建設と救対活動

今、冷たく辛苦で寂寥とした牢獄に横たわる同志諸兄。我々は、余りにも十分にしかこの一ヶ月間の救対活動を果たし得なかつたし、又、よしんば、今後その自己批判的、技術主義的総括一般の下での、所謂救対活動に我々の一切を注いだにせよ、十分なる所謂救対活動の一切を果し得る等の豪語は語り得ないだらう。我々は、あの矮小な裁判斗争主義者でもなければ、小児病的獄中闘争—一般策論者でもない。我々の基本的任務は、再度の蜂起—革命戦争の準備—貫徹であるし、それに向けた非合法党—建軍—国際根拠地創出の諸活動の一切であるだらう。所謂救対活動に於いても、それとの関係に於いてしか、否、それ以外の何ものでもない。とり分け、旧来の事後処理的救対活動からの根底的飛躍と、殺人予備、放火、爆発物等々の重罪で以て問われる、今日の獄中、裁判対策は優れて高度な政治判断の下に為されるべきであり、かかる基本

的確の下、よしんば所謂運動論的過程のテンポとしては二次的形式を呈するにせよ、軍事を組織し得る党建設運動との関係に於いて、その内実に於ける同質性の原則を我々は以下の様に整理し、具体化するべきだと考える。即ち

- ① 半合法活動としての救対活動領域を非合法活動貫徹からの逆規定として捉え直し、
- ② その具体的行動綱領として、膨大な市民社会内物的ヘゲモニー、革命戦線組織化としての救対活動
- ③ そして、そうした課題と同時一体の問題として自明のことながら、獄中同志の暴力的奪還—バスターミユの再現を追求するものである。

ここに於いて、非合法—合法問題に関する我々の基本的視点とは以下の通りである。即ち、権力問題、武装問題等に集中し、表現される、今日の階級闘争の質的飛躍の胎動期に在って、各党派、各活動家の経験主義的認識一般に基因して非合法活動重視化が一般的に確認される中で、その弾圧一般、反動化一般の量的拡大に対する単純の反応として発現する、合法活動—非合法活動に於ける、自然成長性への排絶(既成合法活動領域の外延上に、ただただ反比例的にのみ非合法活動—般を展望する手工業性)等の曖昧性は、断乎、批判—克服されなければならない。

又、一方、基本的党活動と救対活動に於ける、その運動論的連関性、矛盾構造とは、先述した如く、形式に於ける結果性を媒介として出発する救対活動が、その内実に於いて、意識性の結晶環たる基本的党活動の物質化諸条件たる、所謂、組織力を表現するという、相互依存的相互反動的な問題として整理されるべきであり、そこに於ける、不屈の緊張関係に立つてのみ、党組織の単純再生産(事後処理的)領域を突破した、党組織の質的量的拡大再生産としての、獄中同志との政治的結合、奪還、及び、市民社会内物的ヘゲモニー—革命戦線創出運動たる獄中、獄外に至る、一切の救対活動が、その内実を獲ち得るのかを原則的視点の下、今後我々が獄中に在る同志諸兄に對しすべきこと

- ① そうした獄中での物的、思想的、政治的生活の最大限の保障であり、
- ② 且つ、そうした獄中生活そのものの物理的露絶の為の獄中同志の暴力的、

又は、合法的奪還である。

①の具体的内容とは、まず同盟文章、機関誌 etc の差し入れ、及び恒常的な組織的接見を通じた、獄中と獄外及び獄中相互間の思想的・政治的コミニケーションの保障であり、後述の裁判対策の問題提起等を含め、一切の問題整理、意志一致を保障し、その基本の環として、この同盟対策発行の切はすていゆを責任をもって恒常的に保障して、用意である。②に關しては、獄中同志の暴力的奪還が明日あさっての確約の問題として語り得ない現状からして主観的意図はともあれ、合法的域に於ける裁判等への対応の問題として整理されなければならないだろう。そこに於いて裁判に対する我々の基本的視点とは以下のとおりである。

<3> 裁判

基本的に裁判に於ける課題とは

①獄中同志の奪還―暴力的 又は、合法的早期戦線復帰
②闘争主体の正当性の消極的、又は、積極的主張―ブルジョア法内論争に於ける事実問題一般の立証、認否論争―部分的又は、全面的に開き直った全面的政治主張

③階級裁判の大衆的暴露―ブルジョア司法、刑罰法のアパシー化 etc

以上を確認するならば、今我々の前に厳然として問われている所謂大菩薩公判とは、如何なる質と如何なる形態に於いてその運動論を構築すべきなのか。その前に前提的に確認し得る諸事実一般とは以下のとおりである。

①68年10/21、東大公判等での未決長期拘留―実刑判決の 에스カレート(去る11/28東大分割グループ第一回目の判決では9名の有罪判決の内5名が実刑一年半前後、しかもそのうち3名は検事求刑を上回るといった厳しい内容であった)及び、爆発物取締罰則3条(三年以上十年以下)等より予想される未決拘留期間及び刑とは、一応の技術的対応を考慮するにせよ、一般的には年単位の問題であること―保釈の困難性、有罪実刑判決の多分性等。
②一定数の同志が事実―組織関係一般を一定程度供述していること。従って

<4> 法廷に公然たる武装宣伝を

以上、羅列した諸事実の材料一切を整理するならば、最終的には獄中同志諸兄、個々全員の問題―方針提起―交換後、及び、弁護人との法律問題等の意志一致後、確定されるにせよ現時点に於いて我々は、以下の如く大菩薩公判方針の基本的方向は設定され得ると考える。即ち、①②③より考えるに、事実問題一般の認否論争は客観的に困難であり、且つそれに依る益としての減刑の可能性より以上に、大局的には長期裁判―未決長期拘留及び、一定の重刑見せしめの権力に依る既定方針からして、しかも我が赤軍派の真紅なる党派性の曖昧化 etcより、賢明過ぎて大局を失うの結果に陥る危険性が確認し得るだろう。従って我々としては部分的には弁護人に依る法的、技術的装飾を呈するにせよ、基本的には所謂開き直った地平での全面政治主張を軸に公判方針を方向付けるべきだろうと考える。我々は、その法廷に於ける政治主張が、よしんば貫徹されたにせよ、商業紙 etc を媒介としての、その宣伝・煽動に対し一片の幻想すらも抱きはしないし、その限界性の事実は確固として確認するものである。又、我々はかかる政治主張、宣伝を所謂小児病的深層観、及びその限界性に絶望したいわゆるせつな主義に於いて行なうものではない。我々は、あの矮小な裁判闘争主義者でもなければ、小児病的獄中斗争一般賛美論者でもないし、只々武装蜂起主義者であるのだ。我々は獄外に於いて再度の蜂起の準備とその貫徹に向け一切の諸活動を集中させると同時に、獄中同志諸兄が法廷に於いてすらも一体となった不滅の蜂起―世界革命戦争への炎上する情念と意識性に支えられ、70年代世界武装プロレタリアートの前に誇らかに公然たる武装宣伝を行なう。その全意義を死力を尽して、地下党建設―建軍―国際根拠地創出、そして再度の蜂起―革命戦争への貫徹へと必ずや結実せしめるだろうし、又しなければならぬ。

我が赤軍派の革命的同志諸兄／英雄的戦士諸兄／我々のみが、とりわけその英雄的の中核部分たる諸兄らのみが、70年代世界武装プロレタリアートの前に応え切り、現代過渡期世界を止揚し得る唯一の主体であるのだ。同盟は一時的に

即ち、ほぼ一定の事件の全貌がばれていることに依り、事実問題一般の認否論争は困難であり、且つ強いて行なうにせよ(供述調書、起訴状の細部に渡ってイチャモンをつける)、無罪判決及び大幅なる減刑は困難。又、それに依る長期裁判の益と害の問題(松川、メーデー等々)。

③今秋大量起訴者(10/21、11/16/17 etc の千名弱数、及び東大公判、4/28公判との関係より實際上、公判が開始されるのは、来春くらいであること。

④弁護人対策の問題としては、いわゆるトロ弁と称される弁護人の絶対数が決定的に不足している現状より、そのオルグの客観的困難性を考慮するにせよ、又、いわゆる東大弁護団程の完璧なる弁護団を組織し難いにせよ、現在、着実に5名程の弁護人がほぼ結集しつつあり(内2名は確定)、具体的な公判方針、費用等の問題の最終的意志一致の下、近日中に名実共に弁護団を発足させる方向である。

⑤かかる弁護人オルグの客観的困難性より、23日間の留置場段階での弁護士接見は、地裁拘留尋問の際及び少年24名に關する家裁送致の際の集中接見と、それ以外では弁接モレ、極消耗者を優先した個別的弁接の10名余り等であったのが実状である。現在、先の弁護人数名を中心に全員に關する公判問題を軸とした再度の弁護人接見を開始しつつあるし、又、起訴後の接見禁止等解除より、機関紙、パンフの差し入れを兼ね、可能な限りの組織全面動員に依る、全員への接見活動を既に開始している。

⑥一方、最も中心環たる爆発物取扱法に關しては八第一条√治安、又は他人の身体・財産を害する目的に於いて使用し又は、使用せしめた者√死刑、無期懲役、七年以上、八第三条√八一条の目的に於いて製造、輸入、所持√三年以上十年以下、八第六条√八一条に於いて八一条の目的に關し、立証能わざる場合√六ヶ月以上五年以下、の以上がその骨子であり、同志諸兄に關しては、具体的には八三√条に於いて起訴―法廷論点と為されており、仮に先述した事実問題一般の認否論争(供述調書―起訴状の細部に渡ってイチャモンをつける)の公判方針に対応した場合、一定数の部分に關しては八六√条に於ける判決として減刑の可能性があり得るだろうことは一応考慮されるだろう。

後退したにせよ、未だ一切の武装は解除していないし、更なる武装を貫徹するだろう。諸兄らの革命的英雄的闘いと、その鮮血の献身性の下、今統々と若き有能なる革命的戦士達が結集しつつある事実を今一度確認しようではないか。兄弟たち／最後の最後まで闘い抜かれんことを／法廷に公然たる武装宣伝を／一九六九年十一月八日

共産主義者同盟赤軍派 C.C.
共産主義者同盟赤軍派救対本部

―パステイニユ社発行―パステイニユ判例準備部より―

赤軍

共産主義者同盟赤軍派

政治理論機関誌

赤軍No.4, No.5, No.6発売中ノ

No.4,

¥300

No.5, No.6

各¥200

綱領確立のために(Ⅰ)

—過度期世界とプロレタリアー党—

第一章 現代革命論への方法的視点

第二章 世界史的階級闘争の段階としての過度期世界, その二つの歴史的普遍性

第三章 現代帝国主義—現代帝国主義国家

第四章 過度期世界—その歴史的展開

11月闘争総括論文

国際根拠地—蜂起の軍隊—地下活動に集約される69年階級闘争の敗北の教訓と我々の70年方針—No.7と併用されたし。

書店(東京)ウニタ書店, 文献堂, 谷書房, 都丸書店, (関西)三月書房, 曾根崎書店他

共産主義者同盟赤軍派

政治理論機関誌

赤軍 No.7

発行 1970年1月30日

価格 200円

連絡先 東京都新宿区柏木

2-276 福田常雄

TEL (03)369-2380